

高大接続に向けた「主体的に思考し表現する力」の育成 —2017年度初年次教育学会会員調査と 事例分析をもとに—

井下千以子
桜美林大学

1. 問題の背景と本稿の目的

戦後最大の教育改革ともいわれる高大接続改革の最終報告が平成28年3月に明らかにされた。人々の注目は、センター試験は廃止され、大学入試が変わることにあるが、実は従来の学習観の大転換となる「受身の教育から能動的な学びへの転換」という教育の質的転換が改革の根幹にある。その一連の改革の1つが3ポリシー、すなわち学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー：DP)、教育課程編成の方針(カリキュラム・ポリシー：CP)、入学者選抜の方針(アドミッション・ポリシー：AP)の公表と実践である。

これに先立ち、平成26年の中央教育審議会の答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(P.21)では、初年次教育を、アドミッションポリシーに基づき、大学初年度に必要な教育として位置づけ、かつ能動的な学修方法を習得させるため、極めて重要な役割を果たすとして、教育の質的転換を断行するためにもその研究開発が必要であるとしている。

また、平成28年1月に文部科学省が公表した「高大接続改革の全体像」の概念図(図1)では、初年次教育はアドミッションポリシー(AP)に対応した内容であること、またカリキュラムポリシー(CP)に沿って初年次教育を実施すべきであることが明示されており、初年次教育はAPとCPをつなげる要として3ポリシーに位置づけ捉えられていることがわかる。

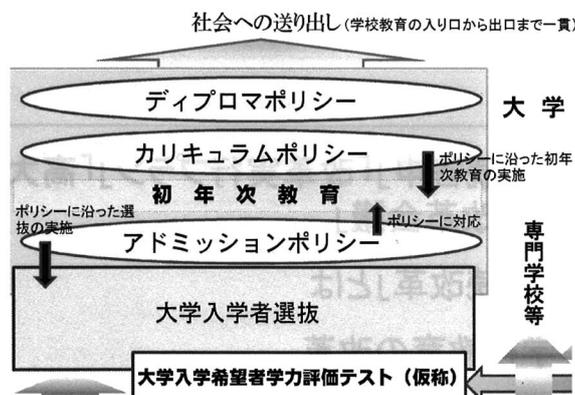


図1 初年次教育と3ポリシーの連関(文科省「高大接続の全体像」を改変)

さらに、教育再生実行会議における入試改革の提言から3年余の検討を経た平成29年3月、文科省と大学入試センターは大学入学選抜実施要綱の見直し予告案や共通テストの記述式モデル問題案などの公表に踏み切った。

記述式問題とは、いわゆる小論文や作文の類ではない。自分でしっかり論理を組み立て表現する力を問う問題である。正解が1つだけでない、適切な情報を抽出・統合し、自分の考えを構造化した文章として表現する能力、すなわち「主体的に思考し判断した上で表現する力」が求められているという(安西, 2017)。

「主体的に思考し判断した上で表現する力」を重視した記述式問題を大学入学選抜に導入しようとする高大接続改革の流れを受け、大学での教育はどうあるべきか。高校と大学の架け橋ともなる初年次教育が果たすべき役割は大きい。

そこで、本稿では「主体的に思考し表現する力」の育成に焦点を絞り、まず2017年度初年次教育学会会員調査結果より、思考力や表現力の育成が初年次教育にどう位置づけられ、2年次以降にどう連動しているのか、現状を読み解いていく。さらに、初年次教育を学士課程教育にどう位置づけ、APからCPへといかにつなげ、内容を充実させていけばよいのか、事例をもとに検討する。

ここでは、桜美林大学における初年次支援科目「大学での学びと経験」とその授業内容を発展させ、開発したテキスト『思考を鍛えるレポート・論文作成法[第2版]』と『思考を鍛える大学の学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで』の事例を取り上げる。学士課程4年間に渡り、「主体的に思考し表現する力」をいかに醸成していくのか、表現力育成の要となるライティング教育に着目し、Writing Across the Curriculumの観点から初年次教育の位置づけと役割を検討する。

2. 2017年度初年次教育学会会員調査結果を読み解く—思考力と表現力育成の観点から

2017年度初年次教育学会会員調査の目的は、3ポリシーの見直しと公表が義務づけられた問題背景を受け、会員が所属する大学での初年次教育の位置づけに変化が見られるか、3ポリシーと初年次教育の関連性を見ようとしたことにある。初年次教育学会員を対象としてWeb調査により2017年5月～6月に実施、最終回答数は172名であった。調査内容は以下の8項目である。

1. 自大学の3つのポリシーについて
2. カリキュラムポリシーと初年次教育との関連性
3. 3つのポリシーを評価する仕組みや取り組みの有無
4. 評価する仕組みの具体的な内容
5. 担当する初年次教育の位置づけ
6. 教えている初年次教育の内容と提供されている初年次教育のタイプ
7. 初年次教育の機能の有効性
8. 初年次教育と2年次の連動性等

本稿では、思考力と表現力育成の観点から調査項目5～8の結果について考察する。

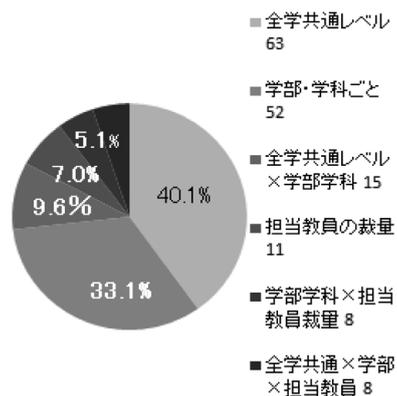


図2 初年次教育の実施体制

表1 初年次教育の教授内容

%	全学共通教育	学部・学科	担当教員の裁量
学習技術	74.4	77.1	74.1
ライティング	69.8	72.3	66.7
プレゼンテーション	69.8	73.5	66.7
ソーシャルスキル	55.8	55.4	51.9
キャリア教育	54.7	47	48.1
リサーチスキル	39.1	32.5	29.6
自校教育	36	31.3	40.7
リメディアル教育	20.8	27.7	22.2
合計数	86	83	27

表2 自大学の初年次教育の分類型

	度数	%
総合型	68	39.5
学習技術型	53	30.8
専門導入型	23	13.4
人間関係型	17	9.9
あてはまらない	11	6.4
合計	172	100.0

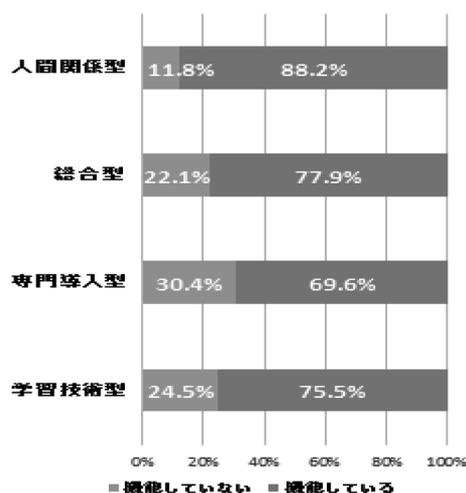


図3 自大学の初年次教育の機能

- ①図2は初年次教育の実施体制の結果を示している。全学共通レベル40.1%、学部・学科ごと33.1%と、組織として取り組んでいることがわかる。
- ②表1の教授内容をみると、学習技術・ライティング・プレゼンテーションがトップ3でスキルと表現力の育成が重視されていることがわかる。しかし、その内容やレベル、スキルの定着度は明らかではない。
- ③表2は自大学の初年次教育の分類型で、総合型39.5%、学習技術30.8%が高く、これらの型にレポートの書き方などが入っていると考えられる。一方、専門導入型は13.8%と低く、学問を通して大学で何を学ぶかを導入する初年次教育は少ないことがわかる。
- ④図3は分類型別にみる自大学の初年次教育の機能性で、どの型も初年次教育は機能していると認識していることがわかる。
- ⑤図4は分類型別にみる初年次教育の2年次への連動性で、人間関係型が高いことがわかる。人間関係力をコミュニケーション力と捉えれば、大学生活への適応に果たす初年次教育の効果は高いことが、本調査を通して実証されたといえよう。一方、学習技

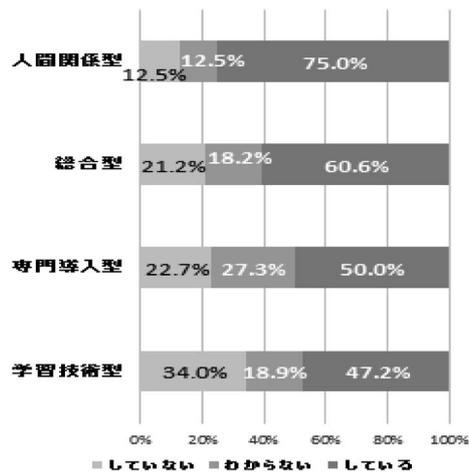


図4 初年次教育と2年次との連動

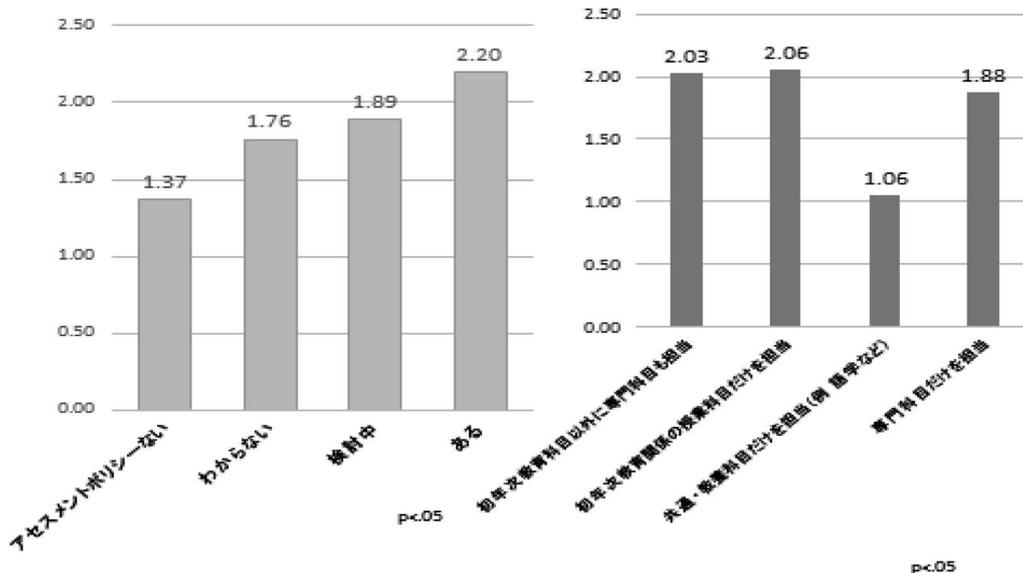


図5(左), 図6(右) 初年次教育は2年次以降に連動

術型は2年次への連動は低いことから、学習技術の教授内容や方法を再検討する必要があることが、思考力や表現力育成の観点からも重要な課題であることがわかった。

⑥図5と図6は初年次教育の2年次との連動性についての一元配置分析結果である。図5からアセスメントポリシーのある大学は2年次への連動性の認識が高いことがわかる。図6では、初年次教育関連科目担当者の2年次へ連動性の認識は高いが、共通・教養科目だけを担当している教員は2年次へ連動性の認識は低いことがわかった。

以上の調査結果から、初年次教育で実施されている取り組みのトップ3は学習技術・ライティング・プレゼンテーションで、スキルと表現力が重視されていることがわかった。

一方で、学習技術型の初年次教育は2年次への連動性は低いことから、学習技術の教育内容や方法を検討する必要があるが、思考力と表現力の育成でも重要な課題といえる。

また、初年次教育の実施体制を分類型別にみると、総合型や学習技術が3割を超えてい

るのに対し、専門導入型は1割強と低く、学問を通して大学で何を学ぶかを導入する初年次教育は少ないこともわかった。

今回の調査結果で明らかになった初年次教育の課題は、筆者が初年次支援科目を担当し、それをテキストとして開発するにあたり、理念として掲げた内容と一致するものであった。すなわち、高校までの知識中心の学習から多様な解のある学びへ視野を広げ、学問での学びを通して主体的に考え抜く力を習得させること、学問の思考様式を学ぶことを初年次から経験させることにあったことから、今回の結果は想定範囲内のことでもあった。それはこれまでの初年次教育学会大会での事例発表や自大学での初年次教育の取り組みを概観する中で考えてきた仮説ともいえる。

汎用的な学習技術やレポートの書き方など知識や技術の学習は2年次以降の学習に連動していないのではないかという問いや、カリキュラムにおける初年次教育の位置づけを明確にするには初年次教育担当者と担当外の教職員の意識改革が必要ではないかという問いである。意識改革には学問導入型など2年次への連動を意識した初年次教育が重要だという意味も内包されている。

3. 初年次でのレポート指導を学士課程カリキュラムに位置づけて考える

初年次でライティングや学習技術に関する科目数は多いものの、学習技術型の初年次教育は2年次への連動性が低いことも調査結果からわかった。その原因の1つとして初年次で汎用的なレポートの書き方を教えたとしても、2年次から始まる専門分野のレポートを書きこなすことは簡単ではないと考えられる。初年次担当教員が内容や教授法を工夫しても2年次からの多様な専門(ディシプリン)に対応したレポートが書けるようになるには、次のステップでの訓練が必要である。

すなわち、初年次での授業デザインも含むコースデザインに留まらず、学士課程4年間を通して、いかに主体的に思考し表現する力を育成するか、カリキュラムデザインとして捉えていく必要があるのではないか。

こうした疑問を抱きつつ初年次科目や専門科目を担当してきた経験を活かし、開発したテキストが『思考を鍛えるレポート・論文作成法[第2版]』(井下, 2014)である。大学で求められるレポートとはいかなるものか、テーマを設定することや、資料をデータベースで検索すること、調べた資料を読み込み、批判的に検討した上で問いを立てることなどを、初心者にもわかるように解説している。

たとえば、テキストの前半では、学生にとって身近な話題「小学生に携帯電話やスマホを持たせることの是非を問う」課題を課し、主体的に思考させる工夫もしている。最初から専門的な内容を課題にすると、学生は自分の意見を展開することが難しいからだ。前半部分を使って、入学前の高校生にレポート課題を課すことも可能であるし、初年次の授業でレポートの基本を体系的にじっくり学ぶこともできる。

テキストの後半は、2年次以降の専門の授業での仮説論証型や仮説検証型のレポート・論文作成に対応できる内容で構成されている。引用の方法だけでなく、なぜ引用することが必要なのか、剽窃やコピペについても丁寧に解説している。

このテキスト1冊を〈辞書〉のように使いこなすことによって、大学4年間のレポート課題に対応できるようにした。開発の背景にあるのは、Writing Across the Curriculum

(WAC)の理念である(井下, 2013)。

WACのねらいは、書き方の鍵となる概念や発想を通じて、学生が「思考すること」を支援することにある(Writing Initiatives Newsletters, 2009)。学士課程4年間のカリキュラムを通じて、専攻とする学問分野の論文形式を学ばせることによって学習活動や研究活動を促進させることができる(Writing in the Disciplines)だけでなく、ディシプリンを越えて分野横断的に学び続ける力(Writing Across the Disciplines)を効果的に発展させることができる(Writing Initiatives Newsletters, 2010)。

4. アクティブラーニングによる総合型初年次教育テキスト開発のねらい

学生が「主体的に思考し表現すること」を支援するためにはレポートの書き方だけでなく、総合的に初年次教育の内容を検討する必要があるだろう。筆者は2006年から桜美林大学の初年次支援科目「大学での学びと経験」を担当してきた。科目の到達目標は主に図7に示した10項目の内容で構成されている。その内容をテキストして著したものが『思考を鍛える大学の学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで』(井下, 2017)である。15回分のワークシートをつけ、すべてアクティブラーニングでおこなうことができる(井下, 2016)。アクティブラーニングに必須の「話す・書く・発表する」活動を取り入れて思考を可視化し、認知プロセスを批判的にモニタリングし、コントロールするメタ認知活動(リフレクション)を活性化するため、授業では毎回ピアレビューや授業外学習(宿題)を課している。

ねらいは、高校までの知識中心の学習から多様な解のある学びへ視野を広げ、学問での学びを通して主体的に考え抜く力を習得させることにある。章立ては、図8に示した。

第1章は、入学前教育としてAO入試に合格した高校生を対象に実施したプログラム「学問の世界へようこそ」を再編したものである。学問の扉を開く鍵は何か。学ぶことの楽しさ、問いを持つことなど、学問の奥深い世界を探検する面白さを解き明かしていく。

第2章では、自分たちの大学を知るという大きなテーマのもと、グループで問いを立て、インタビュー調査を行う。結果をKJ法で分類し、ポスターにまとめ、プレゼンテーションを行う体験学習から一連の研究プロセスを学ぶ。筋道立て結果をまとめる論理的思考法や、協同で創ることを学ぶことができる。ワークを通して仲間意識や自校意識を育むことができる。

第3章では、初心者でもレポートが無理なく書けるように、具体的なワークを段階的に取り入れた。問いを立て、批判的に検討すること、資料の調べ方、引用の仕方を学び、フォーマット(定型的表現)を用いて書くことができる。さらに自己点検評価シート(ルーブリック)を使いこなすことで自律して書けるようになる。

第4章では、キャリアとは何か、アイデンティティ発達論に学びながら、若者がリアルな感覚で自らを見つめ、将来を描くことができるよう、架空の事例を盛り込んだ。アイデンティティ・ステータスによる自己分析をおこなうことで、将来を見通し、大学生活での自分の目標を見出すことができるようになる。

第5章では、これまでの授業を振り返り、学びレポートを書く。

理論を軸として内容を深め、わかりやすくすることは容易ではなかったが、いわゆる初

1. 大学生としての自覚が持てる
2. 大学で学ぶ目的がわかる
3. 仲間の考えや気持ちが理解できる
4. 体験学習から研究プロセスが理解できる
5. 論理的に思考する力がつく
6. 信頼できる資料を調べる力がつく
7. 批判的に思考する力がつく
8. 基本的なレポートが書ける
9. 将来の夢や進路を考えられる
10. 大学生生活に目標を持つことができる

図7 初年次支援科目の到達目標

『思考を鍛える大学の学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで』
(井下, 2017)

目次

第1章 学問の世界へようこそ
 第2章 論理的な考え方を学ぶ
 第3章 レポートの書き方の基本を学ぶ
 第4章 キャリアをデザインする
 第5章 学びを振り返る

* 15回分のワークシート付き

図8 総合型初年次教育テキストの章立て

年次生の向けのハウツー本ではない、〈学問の思考様式を学ぶことを経験するテキスト〉として体系化した。なお、テキストを用いた具体的な指導法については初年次教育学会10周年記念出版『進化する初年次教育』で明らかにしていきたい。

5. 今後の課題

冒頭の図1に示した初年次教育と3ポリシーとの連関の重要性は、今回の調査結果から改めて確認することができた。APに対応した初年次教育となっているか、初年次教育の実態はCPに沿ったものとなっているか、初年次で築いた基礎力がDPに反映されるようになってきているか、それを明確に公表し実践し点検するアセスメントポリシーを整えていく必要もあるだろう。

「主体的に思考し表現する力」の育成は変動する社会で必須の力であり、今後の高大接続改革において、高校と大学をつなぐ初年次教育は要となる。思考力や表現力を育成するためのテキストやアクティブラーニングなどによる教授法の開発、さらには実践した成果を精査することなど、地道に改善を重ねていくことが求められている。

参考文献

- 安西祐一郎 (2017)「高大接続改革の概要公表 能動的学びへの転換 思考力と主体性の重視」日本経済新聞6月5日朝刊。
- 井下千以子 (2013)「思考し表現する力を育む学士課程カリキュラムの構築—Writing Across the Curriculumを目指して」関西FD連絡協議会編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房, pp. 10-30.
- 井下千以子 (2014)『思考を鍛えるレポート・論文作成法[第2版]』慶應義塾大学出版会。
- 井下千以子 (2016)「思考を深めるアカデミックライティング—アクティブラーニングの効要と課題」『IDE 現代の高等教育』No. 582, pp. 21-25.
- 井下千以子 (2017)『思考を鍛える大学の学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで』慶應義塾大学出版会。
- 文部科学省 (2016)「高大接続改革について」平成28年1月
- 文部科学省 (2016)「高大接続システム改革会議最終報告」平成28年3月
- 文部科学省 (2016)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について—すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために—答申」平成28年12月